2018年09月29日（於：対照言語行動学研究会（青山学院））

＜視点＞から＜事態把握＞へ――＜自己ゼロ化＞の言語学と詩学

　　　　　　　東京大学　　池上嘉彦

＜視点＞という用語の曖昧さに注目し、その概念がどのような対立軸の上で捉えうるかを整理。その上で、＜視点＞という名称のもとに論じられるさまざまな問題は、認知言語学で＜事態把握＞(construal)と呼ばれる話者の認知的な営みの一側面として統合され、捉えられるべきであるという認識を提示。以下、その認識に立って、諸言語を横断して観察される相対性として＜主観的（主客合一的）把握＞への好みと＜客観的（主客対立的）把握＞への好みという興味深い（しかし、まだ十分に注目されていない）対立に注目し、検討。

１．＜視点＞と＜事態把握＞

1.1＜視点＞：用語としての曖昧さ

1.2 認知言語学における＜事態把握＞

２．＜事態把握＞の枠組みの中での＜視点＞

2.1 前提としての共通認識

2.2 ＜見る主体＞と＜見られる客体＞の関わり方

３．いくつかの具体例

3.1 川端康成（1964年ノーベル文学賞受賞作家）『雪国』の冒頭の文とその外国語訳

3.2 〔道に迷って、人に尋ねるとき〕

3.3 〔ある部屋にまだ残っている人がいるかどうか調べることを頼まれ、その部屋まで行って中に入って誰もいないことを確認し、携帯電話で報告するとき〕

４．＜主客対立＞的な事態把握とその言語的指標

4.1 （話者としての）＜自己＞のゼロ化

4.2＜(知覚者としての)自己＞とその＜知覚行為(を表す動詞)＞のゼロ化

4.3 さらなる拡張

５．＜自己中心的＞／＜独話的＞なメッセージ